

平成18年11月の解説（府県天気予報）

【11月の天候状況】

上旬前半、日本付近は移動性高気圧に覆われてほぼ全国的に晴れました。その後は低気圧や前線が周期的に通過し、東日本の太平洋側と西日本では4、5日周期で天気は変化しましたが、東日本の日本海側と北日本では低気圧通過後の一時的な冬型の影響で曇りや雨、雪の日が多くなりました。一方、南西諸島では月の前半は移動性高気圧に覆われて晴れの日が多く、後半は低気圧や前線の影響で曇りや雨の日が多くなりました。

月を通しての日照時間はほぼ全国的に平年並でした。降水量はほぼ全国的に平年より多く、平年の170%を上回る観測地点もありました。気温はほぼ全国的に平年より高く、特に北海道地方と九州地方では平年より2以上高い観測地点もありました。

【11月の検証結果】

17時発表の天気予報で「降水の有無」の全国平均の適中率は明日予報で85%、明後日予報で82%と、ともに例年^(注)より2ポイント高くなりました。地域毎の適中率では、明日予報は東北地方で5ポイント、北陸地方で10ポイント例年より高くなりました。明後日予報は近畿地方で6ポイント、沖縄地方で9ポイント例年より低くなりましたが、北海道、東北、関東甲信、北陸地方では5から9ポイント高くなりました。明日の最高気温の予報誤差は中国地方で例年より0.2大きくなりましたが、東北、関東甲信、北陸、四国、九州南部地方では例年より0.2から0.3小さく、全国平均では例年より0.1小さい1.6でした。また、最低気温の予報誤差はほとんどの地方で例年より小さく、全国平均では例年より0.2小さい1.5でした。

(注) 例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【11月の天気予報から】

大気の状態が不安定なところに地上付近に多量の水蒸気が流れ込むと、積乱雲が発生して雷をもたらすことがあります。東京地方での雷の発生数は積乱雲が発達しやすい夏などの暖かい季節に多くなり、寒い季節には少なくなります。1996年から2005年までの10年間に千代田区大手町で雷を観測した日数は124日で、そのうち11月に観測したのは4日だけです。

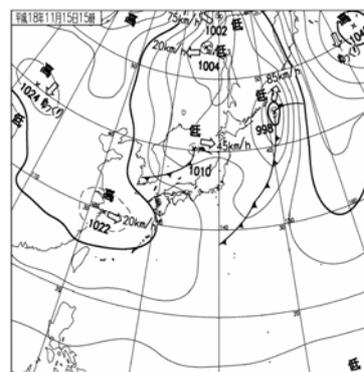
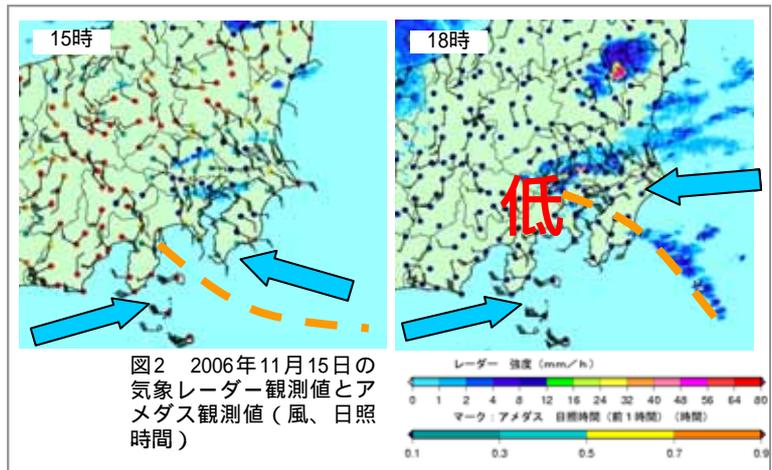


図1 2006年11月15日15時の天気図

11月の東京地方としてはめずらしく、11月15日に雷が発生しました。14日の夕方に発表した明日(15日)の天気予報は「晴れ、明け方から朝のうちくもり」で、雷雨

は予想していませんでした。これは、寒冷前線が14日に北日本から東日本を通過した後、15日になると東日本は高気圧に覆われるため、関東地方では朝のうち雲が残るものの、次第に晴れてくると考えたためです(図1参照)。ところが、東京地方ではいったん晴れたあと、昼ごろから再び雲が広がって夕方から夜にかけて雷を伴った雨とな

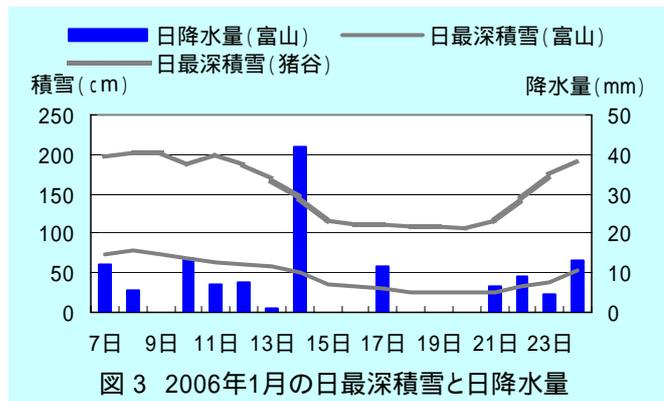


り、東京地方の半数の観測地点で3mmから10mmの雨が観測されました。この原因は、寒冷前線が通過したあと、上空に冷たい空気が流れ込んだところに、午前中に晴れて気温が上がったために大気の状態が不安定になり、加えて地上付近で西と東から流れ込んだ空気がぶつかったところに小さな低気圧が発生し、局地的に積乱雲が発生したためと考えられます(図2参照)。この例のように狭い範囲で発生する雷雨は、上空と地上付近の風、湿度、気温など様々な条件の違いで発生の有無や位置、発達が大きく変わるため、特に予測が難しい現象です。

【1月の天気予報の利用にあたって】

1月には北日本や東日本の日本海側を中心に雪が降ることが多くなり、雪の多い地方では積雪も次第に深くなりますが、気温が高い時には雨が降ることもあります。

2006年1月13日から14日にかけて低気圧が日本付近を通過して北海道地方では雪、東北地方から南の地方では雨が降り、一部で



は大雨となりました。積雪が多い地方ではこの雨と気温の上昇により雪崩が頻発しました。図3は富山(富山市の市街地、標高9m)と猪谷(岐阜県との県境の富山市猪谷、標高215m)の観測点での雪の観測記録です。富山も猪谷も13日から14日にかけての雨で雪が融けて、積雪が急激に減っています。雪融けに伴う雪崩や土砂崩れなどにより、各地で住家の倒壊などの被害が発生しました。

積雪が多い地方では、雪融けによって河川の増水や低い土地での浸水、雪崩や土砂崩れなどが発生するおそれがありますので、天気予報で雨や気温の上昇が予想される時には注意が必要です。